

フルミストについて

フルミストは、すでに世界中で広く使用されている、鼻に接種（点鼻）するタイプのインフルエンザワクチンです。点鼻ですので、針は使用しませんから痛くありません。

日本では現在まだ「認可」されておられません。

普通のインフルエンザワクチン（不活化インフルエンザワクチン）と違い

① 発病を抑えることができる

インフルエンザウイルスは、気道の粘膜に感染を起こして増殖し、全身に広がります。注射型のインフルエンザワクチンは、血液中のインフルエンザウイルスに対するIgG抗体（免疫物質）が作られることで、インフルエンザウイルスが全身に広がるのを抑えます。このIgG抗体は気道粘膜には存在しませんので、気道への感染そのものを抑えることはできません。つまり、感染そのものを防ぐというよりも、「重症化を防ぐ」作用が主になります。

それに対し、経鼻インフルエンザ生ワクチンは、実際に気道（鼻）の粘膜で弱毒化されたウイルスが繁殖するため、気道粘膜でインフルエンザウイルスに対するIgA抗体が作られます。このIgA抗体は、インフルエンザウイルスが気道粘膜に感染を起こし増殖しようとするのを抑えますので、感染を阻止する（発病を抑える）ことができます。特に2～7歳での効果が高く、不活化インフルエンザワクチンの発病予防効果が20～30%程度なのに対し、80%以上の効果があるとされています。

②インフルエンザウイルスの微妙な型の違いに対応できる

インフルエンザウイルスは小さな型の変異を繰り返しており、その変異したものどの型が流行するのかを予測してワクチンがつくられています。対して、経鼻インフルエンザ生ワクチンは、ウイルスが気道粘膜で増殖することによって、IgA抗体が産生されるだけでなく、抗体とは異なる免疫システムである細胞性免疫も刺激されます。この細胞性免疫の働きのおかげで、型が異なっても効果が期待できます。

③効果の持続期間が長い

不活化インフルエンザワクチンの効果は4～6か月程度なのに対し、約1年間効果が持続します。

④痛くない

鼻にスプレーするだけでするので全く痛くありません。ただし、大泣きしているお子さんは、ワクチンが鼻から流れ出てしまうため、接種できないこともあります。

フルミストの副反応

フルミストには、弱毒化（attenuated）された、25℃の低温で増殖する（cold adapted）インフルエンザウイルスが使用されています。弱毒化され病気を起こす力（病原性）はほとんどなく、さらには比較的高温の下気道（気管支・肺）では増殖できないため、重篤な副作用はまずありません。鼻粘膜に軽く感染させるため、約半数の方に鼻炎、鼻詰まりなどの軽い鼻炎症状がみられます。小児では発熱がみられることもあります。もちろん、普通のワクチン同様、極まれにショックやギランバレー症候群などの重篤な副作用が起きる可能性もありますので、その点はご理解いただければと存じます。これは通常のワクチンと同様の確立であり、宝くじで1等が3連発くらいであたる確率になります。